たまのよこやま

東京都埋蔵文化財センター報　No.25　平成4年7月31日

多摩ニュータウンNo.918遺跡（古墳時代）

センターの転換期

今年度より、都心部の調査が一ヶ所増え、市ケ谷の尾張藩上屋敷、丸の内の阿波徳島藩・土佐高知藩上屋敷跡地に港区東新橋の旧汐留貨物駅跡（播磨竜野藩・会津伊達藩等跡地）の調査が開始された。

一方、多摩ニュータウン遺跡群は町田市相原小山地区を中心に約一〇haの調査に縮小されている。平成八年度には、発掘調査が完了する予定である。

このようにセンターの調査範囲が都内全域に拡がるという大きな転換期にさしかかっている。広報・普及事業はというと都民への定着化が進み、講演会等に毎回一〇〇名を越える参加者があり、一五〇脚用意した椅子に座りきれないこともしばしばあり嬉しい悲鳴をあげている。

ともかく、江戸遺跡を発掘すると大量の出土品が発見される。木製品も大型で保存処置におおわらわである。収蔵庫の確保と保存科学の問題が緊急の課題である。

また、建築史、美術史等関連分野との連携も必要で、丘陵から平野へのセンターの新たな胎動が始まった。

（石井則孝）

遺跡だより㉛

古墳時代前期の大形住居跡（東から）

今回は町田市小山町の№918遺跡を紹介します。遺跡は境川に流下する小河川の谷奥を巡る緩斜面上に位置しています。旧石器時代から近代までの遺構と遺物が検出されましたが、ここでは古墳時代の遺構と遺物について簡単に紹介したいと思います。この時期の竪穴住居は52軒調査され、大きく二時期に分けられます。

古墳時代初頭の集落は45軒の竪穴住居、掘立柱建物跡、柱穴列、土坑、土器捨て場からなり、集落の南斜面から検出された№917遺跡の水場遺構も本集落と関連する遺構と考えられます。住居の規模は9m程の大形住居から2m程の小形住居まであります。住居は規模配置等からいくつかの群に分けられそうです。南側に位置する住居群は直径約20mの広場的な空間をもち、広場内の西と東には6本の柱からなる掘立柱建物が検出されました。住居群の外側からは墓かと思われる土坑や火の焚いた跡のある土坑なども検出されています。

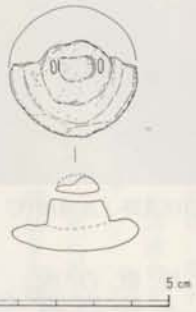
竪穴住居は隅丸の方形から長方形を呈し、炉、柱穴、貯蔵穴、梯子穴、（入口）、周溝（壁溝）、床、壁などから構成され、5m以下の中型から小型の住居は柱穴を持たない例が多い。多くの住居内には、焼土や炭化材が検出され火災にあったと考えられる例や、人為的に埋め戻されたと考えられる住居も認められます。炉は地面を掘りくぼめた地床炉が多く、炉の縁には枕石や土器や土器片を埋め込んだ例もあります。

土器では壺、甕、高坏、鉢、坩等があり、石製品では砥石、台石、敲石、凹石状のもの、鉄器、玉類も数点出土しています。注目すべき遺物には広場脇の住居から出土した土製模造鏡があります。青銅製の鏡を模倣した土製のミニチュア品で、竪穴住居の炉跡と覆土中から2点出土しています。その他の土製品やミニチュア土器も出土していることから集落内の祭祀に使われたと考えられます。

古墳時代後期の住居群は7軒検出され、古墳時代初頭の住居との構造上の大きな違いは壁の一辺に造り付けのかまどがあることと、住居の平面形が正方形になることです。竈の構築方法には粘土のみ、土器と粘土、切り石と粘土を利用するもの等があります。

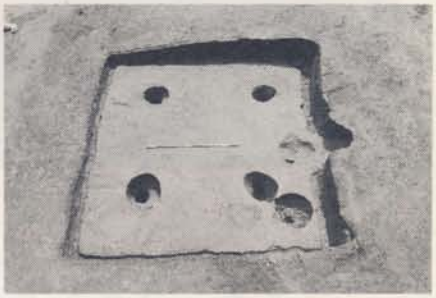
遺物は、竈に架かったままの甕や当時の食器棚の中身がそのままのような、坏や碗が三枚四枚と重なった例が多く発見されています。

（及川良彦）



住居内出土土製模造鏡（½）

カマド横土器出土状態



古墳時代後期の住居跡

古墳時代前期の掘立柱建物跡と柱穴列（南から）

文化財講座〈21〉

縄文時代と人々 (9)

縄文人の住まい

より豊かでゆとりのある生活を送るために、システムキッチン・セキュリティシステム・断熱材などが考え出され、それらを思いどうりに取り入れた一戸建てのマイホームを建てることはサラリーマンの夢といわれています。

しかしながら、現代のように土地高騰が進んだ情勢では、本当に夢と終りかねない厳しい時代になっているといえるでしょう。

これに対して、縄文時代の土地利用は比較的自由がきいていたようですが、建てられた住まいは、現代の建築とは比べ物にならないほど稚拙なものでした。しかし、生活をするうえでの必要なエッセンスは十分にもりこまれたものでした。今回はその住まいをのぞいてみることにしましょう。

縄文時代の住まいは現代建築技術の出発点の一つと考えられるわけですが、その全体像はまだ、不明な点が多いようです。

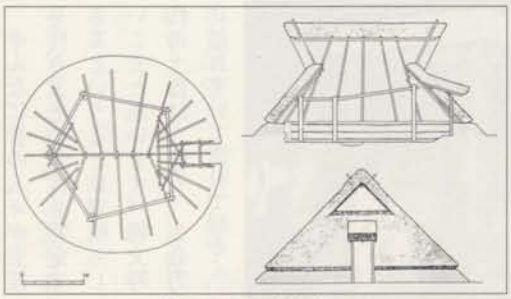
それは、縄文時代の住まいの様子を知ることができる情報源が限られていることが大きな原因となっています。

つまり、先日、奈良県の唐古・鍵遺跡から出土したような住まいの具体的様子を伝える絵画土器の出土は縄文時代にはなく、発掘によって検出された住居跡をもとに民族例などを採用しながら、考えていくしかありません。

縄文時代の住まいは、平地式住居・竪穴式住居・掘立柱建物の3種類の他に洞穴や岩陰も住居として利用されていたようですが、主体的に使われていたのは竪穴式住居でした。

竪穴式住居は、地面を数10cm掘り下げてその面を床として使用し、柱を立てて草や土葺きの上屋をかけるものです。これは縄文時代から平安時代まで作られ、世界的には比較的寒い地方で多く見られる住居形態です。

住居の中心近くには調理・暖房・照明などの役割を担っていた炉が設けられており、その周りでは食事・就寝などの日常生活から祭祀も行われていたようです。



復元された縄文住居

では、実際に竪穴式住居を作るのにはどれ位の労力と日数が必要だったのでしょうか。

当センターにある遺跡庭園の復元住居を例にとって考えてみましょう。

まず、材料の調達としてカヤ採取に4人で10日、柱・垂木材採取に3人で10日かかります。さらに、小屋を組むのに2人で10日、上屋や壁を整えるのに3人で15日かかっています。

以上を総計すると延べ日数で135日かかっており、5人で作業をしても約27日かかる計算となります。

むろん、これを縄文時代にそのまま当てはめることはできませんが、これに近い日数が縄文時代においてもかかっていたと予想されます。

そして、この一ヶ月弱の間に建てられた住まいは、縄文人たちがより快適な生活を送るために暖房・調理施設や耐久性などに様々な工夫を凝らした結晶であり、それは現代人のマイホームに対する工夫と何ら変わりはないのです。（西沢明）

―お知らせ―

石器作り教室

日時…8月20日（木）
午後1時10分～4時
場所…センター会議室
映画…石器の作り方、使い方、石器の製作法の見学等を行います。

申込方法
往復葉書によって、住所、氏名、年令、連絡先電話番号を記入し8月10日（必着）までに下記のあて先に申し込んで下さい。

宛先
〒206多摩市落合1―14―2　東京都埋蔵文化財センター調査研究部

文化財講演会

日時…9月19日（土）
午後1時半～4時半
場所…センター会議室
演題…「列島の先史文化をいかにとらえるか」―その起源をめぐる二つの文化観―
講師…岡本東三先生（千葉大学教授）

平成四年度の展示

当センターの2階展示室と廊下の一部では、多摩ニュータウン遺跡群の調査成果を毎年展示しています（年末年始以外無休）が、今年度は縄文時代草創期に焦点をあてた展示（「縄文誕生」展）を行っています。縄文時代草創期は、10万年以上も長く続き人々が定住することなく狩りと採集によって生活を営んでいた旧石器時代が氷河期の終了とともに終わり、温暖な気候の到来によって次第に定住的な集落をつくり生活した縄文時代の幕開けとなった時期です。多摩ニュータウンとその近隣の地域はこの時期の資料が豊富で、縄文時代の開始のしくみを研究するには非常に良い資料を多く提供してくれています。

展示の中心は、秋川市前田耕地遺跡と多摩ニュータウン遺跡群中の草創期の資料ですが、この中には現在のところ日本最古の土器と考えられている資料（No.796遺跡）も展示されています。土器がようやく作り始められた時代の展示ですので、どうしても石器が中心となりますが、すばらしい石槍を大量に作った当時の人々の生活の跡（最古の住居跡）や食物の残滓も発見されていますので、往時の生活や景観に思いをはせていただけるものと思います。

一定の場所に長くとどまらずに移動生活を送っていた旧石器時代人とは異なり、前田耕地人は、簡単ながらもテント状の住居を営み大量の石槍（尖頭器）を作って、クマ等の陸上動物だけではなく、多摩川を遡上する多くのサケを捕獲していたようです。漁撈が日本で始まった確かな証拠は、この前田耕地遺跡が最初です。

なお、展示にあわせて7月4日と9月19日の土曜日の午後に講演会が行われますので、ふるって御参加下さい。詳細は別載いたします。

（佐藤宏之）

来館者の声

縄文誕生の展覧会をみて

新聞紙上にて1万3千年前の土器が展示されているのを知りまして是非見たいと思いまして伺いました。

そんなに昔の人々が土器を作り又その年代を特定できるということは素晴らしいことと思います。縄文時代の土器は力強く、生命力に溢れていて素朴で暖かく、縄文の人々の心が判る気がします。

展示も大変判り易く楽しく拝見しました。

有難う御座いました。

（2月　Tさん）

展示への感想

比較的まとまっている展示だった。この埋文センターは他県と比べても立派な施設を持っている様に思われる。

いつも思うが、縄文の展示となると土器を前面に出しすぎるきらいがある。もっとも、今回はそれが主体であるから仕方がないが。

ともあれ、今回の展示は個人的な参考になりました。これからも様々な情報を提供して下さるよう頑張って下さい。

（5月　ASさん）

展示ホール→
見学者

←展示ホール入口

縄文クッキーの作り方

数年前から当センターでは縄文土器作り教室やテレビの教育番組で縄文クッキーを実際に作って、食べてみるという企画を披露していました。その後、各方面から問い合わせがあり、お伝えしていましたが、今回はこの紙面を借りて紹介させていただきます。

なお、材料とするマテバシイは本州紀伊半島から四国、九州、沖縄にかけての沿海岸に自生するとされています。

関東地方には自生はしていなかったと考えられていますので、縄文クッキーの材料としては相応しくないものと思われます。しかし、アク・シブの類がほとんどなくアク抜きの工程を省略できること、当センターの近辺の団地にもよく植栽され、入手し易いことなどから、材料として採用しているものです。

（宮崎博・萩原マサ子）

〔縄文クッキーの作り方〕

準備

1、マテバシイの実を拾う。（9月下旬～10月上旬に収穫）
2、洗って茹でる。
3、殻をむき渋皮を取り、粉にする。

方法
イ、縄文式…すり皿とすり石でつぶす。
ロ、現代式…荒く砕いてから、ミキサーにかける。

材料

（30個分）

マテバシイの粉　200g
ヤマノイモ（大和芋）　80g……すりおろしておく
ウズラの卵　8ケ……わりほぐしておく　―A
ハチミツ　小さじ4杯
塩　少々
水　適量（10～20cc）
オニグルミ　30～40g……ローストして荒く刻んでおく

作り方

① 材料Aを混ぜ合わせ、固いようなら、水10cc～20ccで耳たぶくらいの固さくらいの固さまで調整する。
←
② 30個に分け、丸め、好みの形に整える。
←
③ オーブンで焼く。

＊クルミは好みで…①最後に、ザックリ混ぜてよし、
②の上にのせて（さし込むように押さえる）もよし。

縄文クッキーの作り方

焼けた石の上でクッキーを焼く

縄文クッキーをどうぞ！

センター調査の概要

7月15日現在

多摩ニュータウン遺跡群では7カ所の発掘調査を行っていますが、他に都心部において3カ所の調査を行っています。

7月15日の時点での調査の概要を示しますが、現在、注目されることの多いのが都心部の江戸遺跡の発掘です。例えば、阿波徳島・土佐高知藩上屋敷跡は丸の内の遺跡発掘というだけでも注目されますが、藩邸の境にあった濠や木樋と井戸などの発見からも大きな成果が出されつつあります。木樋配置などの資料は今後、大都市江戸の上水システムを研究するための良好な資料となると思われます。また尾張藩上屋敷跡と丸の内では当該藩邸以前の他藩の屋敷跡や旗本屋敷の跡が発見され、江戸の都市計画研究等にとって基礎的な資料になると思います。

（千野裕道）

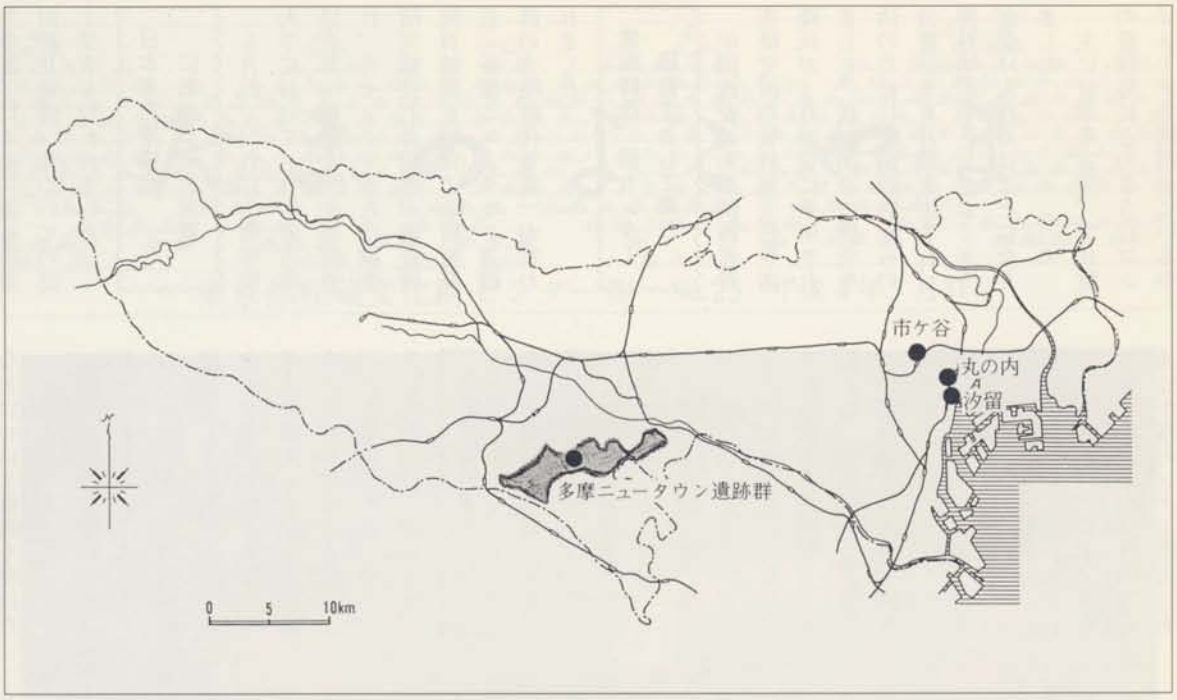
センター調査の概要

遺跡名 場所	主な遺構・遺物
多摩ニュータウンNo.951、952 町田市小山	縄文時代陥し穴29、早期炉穴30（野島式） 集石1
多摩ニュータウンNo.939、933 町田市小山	縄文時代陥し穴6、平安時代住居跡7 平安時代円形土坑40、、水場遺構1 （弥生時代中期住居跡）、中近世道状遺構
多摩ニュータウンNo.955、956 町田市小山	縄文時代陥し穴39、ﾌﾗｽｺ状土坑1、集石3、 古代円形土坑20、平安時代住居跡1
多摩ニュータウンNo.106、432 八王子市越野	縄文時代陥し穴100、中世堀1、近世以降土坑5 炭焼き窯1、
多摩ニュータウンNo.72 八王子市堀之内	縄文時代住居跡4、縄文時代陥し穴50、集石3、 平安時代住居跡4、地下式横穴2、井戸1、 旧石器時代剥片250、縄文早期条痕文系土器 縄文時代中期の土器、青銅製帯金具1
多摩ニュータウンNo.913、914 町田市小山	古墳時代住居跡4
多摩ニュータウンNo.113、492 八王子市上由木	旧石器時代遺物集中部7、縄文時代住居跡10 縄文時代陥し穴120、平安時代住居跡8、 近世廃寺跡1、ナイフ形石器
尾張藩上屋敷跡 新宿区市ヶ谷	礎石建物跡、ゴミ穴、土塁（御土居跡） 石組溝、井戸、屋敷西御殿の一部、 出雲広瀬藩屋敷の一部
土佐高知藩 ・阿波徳島藩上屋敷跡 千代田区丸の内	屋敷境界の堀、窖、上水木樋、上水井戸 堀抜き井戸、瓦溜、建物跡、石敷遺構 側溝、土蔵
旧汐留貨物駅跡 港区東新橋	播磨竜野藩屋敷、陸奥伊達藩上屋敷跡の調査 礎石建物跡、上水木樋

汐留

市ヶ谷

丸の内



平成四年度の調査地点

文化財講演会

新しく公開された展示「縄文誕生」に合わせて4回にわたって講演会が開催されることになりました。まず始めに3月7日（土）、当センター調査研究員原川雄二による講演「縄文時代草創期の生活と土器」、東京都教育委員会学芸員宮崎博氏による講演「秋川市前田耕地遺跡の縄文時代草創期」が行われました。宮崎氏には、今回の展示資料の中で大きな位置を占める前田耕地遺跡の紹介を平易に講演していただきました。参加者は156人でした。

5月30日（土）には東京大学文学部助手大貫静夫氏による講演「極東の先史文化」が行われました。主にシベリアから中国にわたる新石器文化の初期段階の土器を中心に紹介していただくと共に当センターのホールに展示されたシベリアのグロマトゥーハ遺跡出土の土器の位置付けについても氏の考察を紹介していただきました。参加者は115名でした。

7月4日（土）には国学院大学文学部教授小林達雄氏による講演「縄文姿勢方針の形成」が行われました。縄文文化誕生の意味を旧石器時代の内容と比較しながら、さらに現代文化からは鏡の役割を果たすとし、生態学的バランスのとれた縄文文化を平易に話されました。参加者は143名でした。

講演する小林達雄先生

東京都遺跡調査研究発表会 17

3月20日（金）に板橋区産文ホールにおいて都内の遺跡調査研究発表会が開催されました。当センターからは飯塚武司調査研究員が「多摩ニュータウンNo.916遺跡」、内野正調査研究員が「尾張藩上屋敷跡遺跡」について発表を行ないました。また栗城譲一・竹尾進・武

笠多恵子による「調布市飛田給北遺跡」についての誌上発表も行われました。

日本考古学協会における研究発表

5月23、24日に山梨学院大学において「日本考古学協会第58回総会」が開催され、当センターからは調査研究部長石井則孝、調査研究員鶴間正昭による研究発表「多摩ニュータウン遺跡群の古墳時代集落」が行われました。

焦南峰氏、当センター研修生として来日

中国西安にある陝西省考古研究所の資料室主任焦南峰氏が3月23日に来所されました。我が国での研究生活のために中国政府からの公費が8カ月間支出され、海外研究者として当センターが受け入れるはことになりました。

主に日本考古学、文化財の管理等にどのようにコンピュータを利用しているかなどについて研修を受けたいと望んでいます。

海外研究者の受け入れは当センターとしては初めてのことですが、他の同種組織にもあまり例がありません。今後、文化財あるいは考古学研究を介しての国際交流は益々増えるものと思われますが、そのための一助にもなればと思います。

汐留分室のオープン

旧汐留貨物駅構内跡地の再開発が予定されていますが、伊達藩、竜野藩等の屋敷跡であることが判明しています。5月に、その調査のための当センター分室が開設されました。これには千葉基次調査研究係長、小島正裕、福田敏一、斉藤進、石崎俊哉調査研究員が調査にあたります。

文部省科学研究費補助金の交付

文部省から平成4年度科学研究費補助金交付の内定通知が当センター職員にありました。

石井則孝　「都市における近世考古学の調査方法の確立について」

松崎元樹　「奈良・平安時代の武器および馬具の生産に関する研究」

千野裕道　「古代木工ロクロ技術の研究」

映画「森と縄文人」奨励賞を受賞

当センター創立10周年記念映画「森と縄文人」が第30回日本産業映画・ビデオコンクールにおいて奨励賞に決定され6月11日如水会館において表彰されました。

研究活動への助成

今年度職員研究助成が7月6日に発表されました。

各々、ユニークな研究となるよう期待されています。

▽グループ研究

「旧石器時代考古資料の統計的研究ーデータベース作成のための基礎的分析ー」鈴木美保、佐藤宏之

▽個人研究

「多摩ニュータウン遺跡群における早期後半の土器の地域性ー末葉を中心としてー」　金持健司

「一緡(さし)は何枚か」　竹尾進

海外からの研究者

3月26日（木）

遼寧省文物考古研究所所長辛占山他3名の来所

5月1日（金）

ロシア共和国科学アカデミー極東歴史考古民族研究所所長ラーリン氏来所

7且6日（月）

ロシア共和国イルクーツク大学イネシン上級研究員、中国古脊椎与古人類研究所教授蓋培、イリノイ大学人類学研究所助教授オリガ・ソーフェル氏を始め4カ国11名の旧石器研究者が来所されました。

当日の夕方からは、職員を対象としたミニ講演会を催し、蓋培、イネシン、ソーフェルの各氏には細石器文化を中心とした講演をお願いしました。

人の動き

3月31日付け、総務課玉村公一係長が退職され、長井泰紀係長が都多摩整備本部へ転出されました。後任には4月1日付けで、それぞれ田無工業高校から北村文夫が多摩整備本部から渡邊晃が就任しました。

7月1日付け、所長小畑憲司が総務局行政監査部へ転出し、後任に都多摩整備本部から森久保啓二が就任しました。

―あとがき―

このセンター報を6月末には刊行したいものと考えていましたが、日頃の怠慢がたたり、およそ一カ月遅れてしまいました。申し訳ありません。

次号は予定通り、刊行したいと思います。

発　行
㈶東京都教育文化財団
東京都埋蔵文化財センター
〒206 東京都多摩市落合1―14―2
☎ 0423-73-5296
平成4年7月31日